3-2

主題 心に寄り添うケアを実施して

医療ターミナルケア

副題 内観から見てきた事とグリーフケアから学んだ事

施設での看取り

研究期間 14ヶ月

事業所 社会福祉法人積善会 特別養護老人ホーム

発表者：荒武照世（あらたけてるよ）

アドバイザー：市川光男（いちかわみつお）

共同研究者：森田ひろみ（もりたひろみ）

電話 0428-23-6776

メール sekizen@poppy.con.ne.jp

FAX 0428-23-6794

URL <http://www.nagabuchien.or.jp>今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

昭和60年に開設された定員100名の特別養護老人ホームで、居宅介護支援事業（平成18年度～）通所介護事業（平成22年度～）認知症対応型通所介護事業（平成21年度～）を提供している。人生の最終章を暖かい空間で、を目標に本人や家族が満足できる終末期ケアを目指し、いのちを看取る専門家として、苦痛が無く穏やかに旅立ってゆけるように、安らかな看取りに取り組んでいる。

《研究前の状況と課題》

当施設では開設当初から、看取り介護を実施しているが、新規入職後間もない職員から終末期になると何をしてあげたらよいか解らないとか、利用者のそばに行くのがなんとなく怖いという率直な意見が届いた。

自分の身内の死を一度も体験した事のない20代前半の介護スタッフと共に、皆でいのちを看取るという同じ目的に向かうためには、年に一度の学習会では伝えきれないことが多いと感じた。旅立つ利用者を平穏に看取ってゆく為には、肉体的ケアと共に心理的ケアが重要であり、心に寄り添う支援ができるようになりたいと考えた。その為には死生観を育むための看取り教育が、是非必要だと考え資料集の作成に取り組んだ。その後、事例検討を重ねながら看取りの現場でどのように人々を支援したらよいかという事につき取り組んでみた結果を報告する。

《研究の目標と期待する成果》

1. 職員が同じ目線、土俵で看取り介護の支援が出来ることを期待して死生観を育むための資料集を作成することに取り組んだ。
2. 経験の少ない職員に対し死に対する不安や恐怖を取り除く目的で個別学習に取り組んだ。
3. 見取りという言葉が持っている意味や死生観を育むことを期待して絵本などで学んだ。
4. 旅立つ利用者様を支援する為に心に寄り添うケアが出来るように慣れることを期待して内観法に取り組んだ。
5. 家族に対するグリーフケアが出来ることを期待して入所時から家族へのケアを視野に入れ利用者様が旅立った後、手紙を書いたり電話で近況を聞いたりすることに積極的に取り組んだ。

《具体的な取り組みの内容》

平成 20 年 10 月～平成 21 年 2 月
死生観を育む学習会を実施する資料集作り
スピリチュアルケアセミナーで学ぶ：高野山大学
平成 20 年 9 月
事例 1 の検討会を重ねる
平成 20 年 10 月
事例 1 に対し内観法を実施
妻と娘に対し TEL 手紙で連絡する
新井満著 般若心経の読み聞かせをする
平成 20 年 11 月
事例 1 の家族へ手紙を出す
平成 20 年 12 月 8 日
事例 1 旅立ち
平成 20 年 12 月下旬
事例 1 に読み聞かせていた本を姉と娘に贈る
平成 21 年 3 月
死生観を育む為の看取り学習会の実施
見取りで旅立った方の事例検討
平成 21 年 6 月
新入職員と共に死について絵本で学ぶ
平成 21 年 8 月 31 日
利用者が旅立った後振り返りの会を開催
平成 21 年 11 月事例 2 の検討
平成 21 年 11 月 26 日
事例 2 旅立ち
平成 21 年 11 月 30 日
事例 2 の家族へ電話や手紙を書いて送る
発表に関し家族から同意を得ている

《取り組みの結果と評価》

1、振り返りの会で学ぶことはとても多く看取り介護は、やりがいがあり達成感があるという意見や、看取り介護についてもっと勉強しようという雰囲気が強くなってきた。
2、内観法を実施した結果、事例 1 は今まで妻に対して持っていた感情が変化し、人間は死の直前まで成長するのだということがわかった。
3、家族に対するグリーフケアとして事例 2 の妻へ電話や手紙を書いたが、夫の言葉を伝えると、主人の言葉は心の支えになり、勇気をもって生きていくことが出来ていると近況報告があった。

《まとめ》

看取り介護を実施する為には、本人や家族の希望や考えを尊重しながら相手が大事にしている事を護りながらすすめてゆく必要がある。その為に職員は死生学（医学や神学ばかりでなく哲学倫理学 社会学 教育学 法学 心理学 文学 美術 音楽等幅広い学びが必要）を学ぶ必要があり、家族に対してはデス・エデュケーションが是非必要であると考えます。

《参考文献》

アルフォンスデーケン 死とどう向き合うか
清水哲郎・井坂青司 生命と人生の倫理
柏木哲夫 死を看取る医学
ミルトンメイヤロフ ケアの本質
清水哲郎 どう生きどう死ぬか
ロバートAニーメーヤー 鈴木剛子訳
大切なものを失ったあなたに

《提案と発信》

すべての人が死ぬが、死について明快な態度を持っている人は少ない。今、医療や介護の現場では、生命倫理や生命に関する自己決定等解決しなければならない問題がたくさんある。家族の中で命のバトンタッチが失われている現在、施設における看取りの場面は、いのちを見取る文化の継承の場でもある。人の老病死が避けられなくなった時、家族と共に死について学び触覚から生まれる死生観を育む良い機会である。

【メモ欄】追加資料 有 無